

# どうぶつこうえんニュース

Chiba Zoological Park News

No.26



# どうぶつと私… (21)

Animals and I

## ナチュラリストへの目覚め

ケビン・ショート  
自然誌作家



ぼくの生まれ育った故郷は、アメリカの最も大きな大都会ニューヨークだったが、ブルックリンという、有名な観光地やビジネス街などからだいぶ離れた平凡な住宅街だった。言い換えれば、ニューヨークの下町と言ってよいだろう。ぼくたちの家は、ニューヨークでも指折りの大きな公園であるプロスペクト・パークのすぐ隣だった。この公園には、ナラやカエデ類の木が多くて、秋はドングリをよく集めて持って帰った。多分、ぼくの始めて付き合った野生動物といえば、このプロスペクト・パークに住むリスだっただろう。リスはドングリなどの木の实も食べたが、一番の大好物はピーナッツだった。ニューヨークのリスたちは、人間を恐がらず、平気でぼくたちの手からピーナッツを貰って、木のうろに隠した。

プロスペクト・パークにはブルックリン動物園もある。ぼくの親父は、ニューヨークで生まれ育った都会人なのに、意外に動物好きだった。幼い頃からぼくを動物園や博物館によく連れて行ってくれた。ニューヨークには、ブルックリン動物園の他、マンハッタンにあるセントラル・パーク動物園とブロンクス動物園もあり、さらにアメリカ自然史博物館もある。ぼくは、実際のフィールドよりも、こういった動物園や博物館で始めて動物の神秘的な魅力を感じたのだろう。その頃、アメリカのテレビで、「ザ・ジャングル」や「ワイルド・キングダム」などの初代生き物ドキュメンタリーも放送されていた。ぼくはこういう番組は絶対見逃さなかった。

しかし、幼いぼくに特に強いインパクトを与えたのは、セントラル・パークのすぐ隣りにあるアメリカ自然史博物館だった。この博物館は、多くの恐竜の骨格で有名だが、「ジオラマ」という、世界各地の動物をそれぞれ実際に住んでいる自然環境の中で描いた生態展示も素晴らしい。ジオラマ展示は前の方に動物の剥製が立ち、その周りに棲息地から持ってきた石や植物が復元されている。そして、バックに棲息地の風景が絵に書かれている。前と後が隙間なくうまく溶け込み、本当にリアルに見える。

親父の話によると、ぼくは幼い頃からこの博物館に一目惚れで、ジオラマは特に気に入っていたらしい。長い間シベリアトラなどのジオラマの前にじっと立って眺めていた。幼いぼくは、その展示の中に吸い込まれ、想像の中で世界のジャングル、砂漠などの大自然を探検した。それ以来、ぼくは探検家になりたいという夢を抱き続けてきた。

ぼくは今、実際のフィールド・ワークを通して動物を楽しんでいるが、幼い頃の動物園や博物館の影響は今でも強く残っていると思う。

## 目次

表紙	1
どうぶつと私 (21)	2
グラビア エミュウ	3
特集 「アメリカの動物園・博物館見聞記 II」	4
飼育レポート 「DNAの話」	5
子ども動物園へようこそ	6
飼育よもやま話 健康管理センターから	8
動物公園の動物 <sup>①</sup> 動物公園の植物 <sup>①</sup>	9
動物公園日誌から	10

## 表紙の動物説明

### チンパンジー

アフリカ西部から中央部にかけての森林からサバナまで、かなり広い範囲に集団で生息しています。

集団は10数頭から100頭前後と幅があり、雌は成熟すると別の集団に移ります。

主としてイチジクなどの果実を好んで食べますが、肉食もし、集団で狩りをしたり、いろいろな道具を使って食物を得るなど高い知能を持ち、人類の起源を知る上でも大変興味深い動物です。

## 動物飼育数

哺乳類	66種	434点
鳥類	90種	378点
爬虫類	4種	20点
両生類	1種	1点
魚類	2種	4点
総計	163種	837点
	平成9年	9月末現在

# エミユウ

Emu

ヒクイドリ目 エミユウ科



エミユウはダチョウやレアとともに飛べない鳥としてよく知られています。生息地はオーストラリアの森林や草原で、砂漠地帯にはほとんどいません。

エミユウの羽は独特の構造をしていて、まるで<sup>羽</sup>蓑をつけたように体からぶら下がり生えている羽は二重になっています。翼は退化して小さくなっていますが、脚が長くて丈夫で、全力で走れば時速50kmぐらいで走れます。

雌は濃緑色の光沢のある卵を10数個生みますが、抱卵するのは雄で、ほとんど抱きっぱなしで55日前後で孵化し、雛の世話も雄がします。雛は植物の種子や果実、昆虫などの栄養豊富な餌を好んで食べるため急速に成長し6ヵ月ほどで独立します。

(秦 舜二 Shunji Hata)

## 特集

# アメリカの動物園，博物館 見聞記Ⅱ

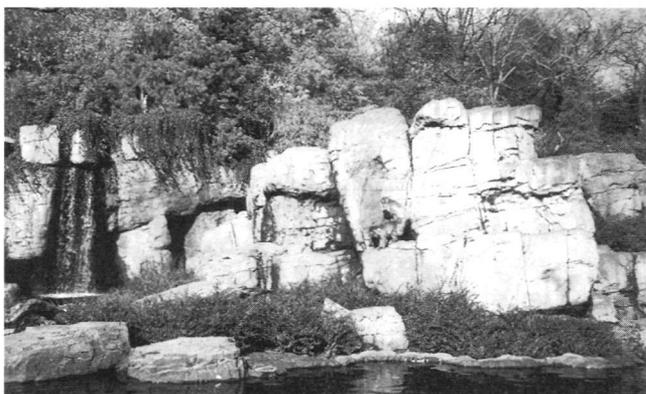
### ○セントラルパーク動物園

ニューヨーク市の中心にあるセントラルパークは市民の憩いの場であり、樹木が多く、野鳥やリスなどの動物も多く見られる広大な公園です。その中の唯一の施設としてあるのがこの動物園で、近年、名を変えセントラルパーク・ワイルドライフ・センターが正式名称です。運営はブロンクス動物園と同じニューヨーク動物園協会が行っています。

アメリカで一番古い動物園で、広さは2.2ヘクタールと狭いが、歴史を感じさせる古い動物舎と鉄柵でゾウやライオンなどを展示していましたが、1985年から15年計画で大改装が始まり、見違えるような最先端の展示法の“生態的展示”に変わりました。

レンガ造りのゲート横には古くからあるクマの造像、ゲートの上にはバイオリンなどの楽器をかかえたクマやヤギの造像が時計に合わせて音楽とともに回る、しかけ時計があります。訪問した日は時計もくま回っていて、造像も動きませんでした。入園料を払って入ると、すぐ右側に丸くガラスで囲まれた池にアシカが泳いでいました。池の真中は大きな擬岩でできている島があります。

先に進むと、“極地帯”の展示で、室内に極地の景色にジェンツーペンギンとヒゲペンギンがたくさんいました。ちょうど給餌の時間で、女性の飼育係員が魚（イワシのような細い魚）を手わたして与え、男性の飼育係員はノートをつけていました。ガラスばかりで水中をいきよよく泳ぐ姿がよく見えました。観客通路では50～60才くらいの女性（ボランティア）がハンドマイク片手にペンギンの説明を言葉たくみに10分以上したあと、質問を受けていました。私も少し質問をしてみました。説明をするボランティアは週1回（夕方）の研修を10回くらい受けたあと、実際にトレーニングをして、実地につくこと、各曜日数人でグループを組み、責任をもって説明をすることなどの解答をえました。そのとなりは、海岸の岸壁を再現した展示場にはアザラシ、そして岩場を再現した展示場には、ホッキョクグマがあり、ガラス越しに泳ぐ姿を見ることができます。



背景とマッチしたニホンザルの展示

“温帯”の展示ではまわりを広葉樹にかこまれた池の中の島には、数本の木が立っており、木に登るニホンザルが見えます。そのほかレッサーパンダやカワウソが展示され、ニューヨーク

郊外の池も再現されています。

“熱帯”の展示は、2階建てで、中南米の熱帯雨林が林床から樹冠まで、精巧につくられた擬木や生きた植物で再現されています。大きなガラスの水そうにはピラニア、ガラスの展示室には数万匹のハキリアリが葉を切って土の中の巣に運びこむ様子がみられます。そのほか、コウモリ、ニシキヘビ、カイマン（ワニの一種）、コロブス、たくさんの鳥が生息環境にすんでいるかのように展示されています。



オオハシの生態的展示

以上がこの動物園の動物展示のすべてです。

### ○ニューヨーク自然史博物館

都心のセントラルパークのすぐそばにあるこの博物館は、1969年に創設され世界で有数の展示内容をもつ自然史博物館で、収蔵品は約350万点です。1階はホール中央に全長27mのシロナガスクジラの模型が天井からつり下げられ、海の生物を地域別に展示しています。ほかに北米大陸に生息する動物の剥製が30以上のジオラマによって展示されています。また幅18mの巨大なスクリーンのIMAXシアターがあります。2階は8頭のアフリカゾウの剥製、アフリカのライオン、サイ、ゴリラなど動物の28のジオラマなどがあります。3階はたくさんの霊長類の剥製や骨格標本が並べられ、分類や進化を学ぶことができます。また北米の鳥類の剥製、世界各地の爬虫類、両生類の剥製も展示されています。4階は最も人気がある恐竜の展示があり、脊椎動物の進化が魚から哺乳類までたくさんの化石や骨格標本を使って説明されています。この博物館の特徴のひとつはジオ



セーブルアンテロップのジオラマ

ラマが多く、哺乳類や鳥の剥製が生きたときとその自然環境で暮らしている様が見事に再現されている点です。動物園の生態的展示の原点は50年前に作られたこれらのジオラマにあるように思いました。

(宝川 範久 Norihisa Takaragawa)

## DNAのお話

自動車の中にあった血痕から被害者と同じ型のDNAが確認されたなどとDNA（遺伝子）の話題がメディアをにぎわしています。では、この様に話題の中心に成りつつあるDNAとはいったいどんなものなのでしょうか？。DNAは総ての生物の体の中にある物質で、正式名称は「デオキシリボ核酸」と呼ばれています。DNAは大変小さく、みなさんの目ではみることはできませんが、電子顕微鏡で

拡大してみると長い糸状の構造をしています。さらにこの糸の様なDNAは二重のらせん構造をしているのです。人の体から総てのDNAを取り出してみますと数十グラムは得られるでしょう。DNAは遺伝子であると言われますが、単に親から子へ遺伝物質を伝えるだけではなく、総ての細胞の中で、DNAはこまごまとした司令を出し、誕生から死に至るまで、生きるうえで必要な指示を絶え間なく行っているのです。しいて言えばDNAの配列はその種の設計図なのです。その設計図も細胞の核の中にある染色体の中に折りたたみ様にしてしまっている「核のDNA」と核の外にあるミトコンドリアと呼ばれる細胞内の器官や植物では葉緑体の中にある「核外のDNA」と二つのタイプがあり、細菌の中にも「プラスミドDNA」と呼ばれる核外のDNAがあります。これらの設計図を読むことによって種や個体の識別、系統関係などの解読が可能となるのです。

### ジュラシックパークは可能か

琥珀の中にいた蚊がすっていた血液からDNAを取り出し、そのDNAから絶滅した恐竜を作り出したお話です。最近の技術を使えば理論的には可能です。しかし、DNAは大変壊れやすいので、完全な形で保存されている可能性は0に近いのです。設計図が無ければ再生するわけにはいきません。最近、ネアンデルタール人の化石から359個のDNA抽出に成功し、現代人と比較したところ我々の祖先ではないことが判明したとされています。しかし、たった359個ではネアンデルタール人を再生する事はできないのです。

### 動物園でのDNAの利用

#### ◎血縁関係の分析

絶滅も時間の問題と考えられていたカリフォルニアコンドルが奇跡的に回復したのですが、これはDNA配列の解析で総て

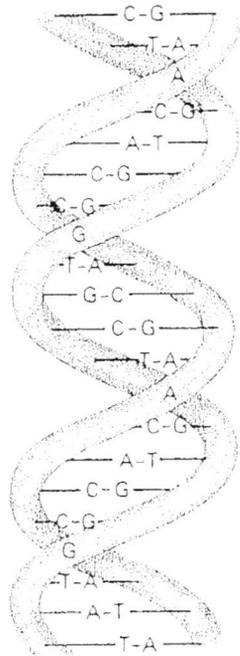
のカリフォルニアコンドルの家系図を作り、血のつながりのない雄と雌を組合せることにより、27羽から76羽（1993）に増え、一部はすでに野生復帰の試みがなされています。とにかくDNA解析と動物園などの専門家の努力で絶滅しかけた一種の鳥がピンチを脱したのです。

#### ◎親子鑑定

DNAの中には何度も同じ配列を繰り返すところがあり、これは反復配列と呼ばれています。これを比較することで親子鑑定ができるようになりました。指紋と同じ様に個体識別ができることからフィンガープリントとも呼ばれています。

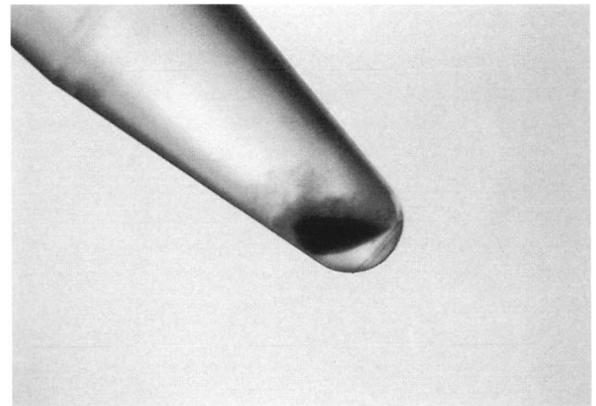
#### ◎性別鑑定

雌雄がわからなくて困るのはほとんど鳥類ですが、血液や皮膚を培養した染色体の中の性染色体を確認して雄か雌かを決定します。鳥類の雌だけにある特別なDNA配列が発見され、こ



\* 2本のDNA鎖は一つの軸のまわりに巻いて、二重らせんDNAを形づくっている。

DNAの構造図



—抽出されたDNA—

の配列を確認することにより性別を確定する方法が確立されたのです。染色体の培養ではどんなに早くても一週間かかりましたが、この方法は簡単で極端に言えば半日あれば性別がわかります。

#### ◎病気の診断

体に入った細菌や原虫のDNAが混ざった病気の動物のDNAがあれば病気の診断も可能です。例えば、結核はサル仲間にも多く、人にも感染しますので検疫の時注意しなければならない病気の一つです。今までは人と同じ様にツベルクリン反応で調べましたが、サルでは正確ではありませんでした。人の結核菌を増幅するプライマー（探査子）が開発され、性別鑑定と同様にプライマーと検体のDNAを一緒に入れPCR法で増幅すると、もし検体のDNAの中に菌があれば寒天培地にバンドが現れるのです。同じ方法でペンギンのマラリアの診断も可能です。

#### 動物園で考えていること

日本の動物園や水族館の団体である社団法人日本動物園水族館協会の種保存委員会では、希少種を遺伝的多様性を保持して繁殖させていくため技術部会を新設し、その中に人工受精や卵移植による繁殖技術の開発と遺伝子資源である精子・卵子やDNAを保存し、活用を行う準備をしております。現在は捨てられているものでも何年か後には貴重な試料として役に立つことが十分考えられます。 宗近 功 (Isao Munechika)

# 子ども動物園へようこそ

## トピックス かわいいウシがきたよ！

子ども牧場にはウマ、ウシ、ブタ、ロバを飼育・展示していますが、ウシが少し大きく成長したのでかわいい仔ウシ2頭が新しくやって来ました。ウシ（彼女）達の紹介をちょっと……。

私達が牛乳、バター、チーズで大いに利用しているのでウシはとっても身近で、かつ有益な動物といえるでしょう。

それでは家畜としてのウシが誕生したのは…今から1万年以上も前（石器時代）に飼い馴らされたウシの存在が明らかになっています。そして現在に至るまでの長い道のりのなかで家畜「ウシ」が生まれてきた歴史と、さらに人類が高度な文明へ脱皮する要因のひとつにウシの存在を垣間みることができるのです。

本来ウシの利用はその肉の利用から出発しており、今日でも食欲を満たす産物のひとつですし、嗜好性の大変高い食物であることに異論はないでしょう。ただ、広い世界のこと、その価値の違いからウシを神聖化している地域が一部にみられ、食卓を賑わす……という訳にはいかないようです。

さて、前置きが長くなりましたが、ウシの分布は世界に広く広がりをみせアジア、ヨーロッパ、アフリカなどにみられます。わが国には古来からの和牛とヨーロッパ品種の交雑した改良種がもっぱら肉用種として現在に至っています。

乳用種では欧米のホルスタイン種が大多数を占めています。

わが千葉県も畜産県として、その供給において寄与している事をご存知の方もさぞ多いでしょう。

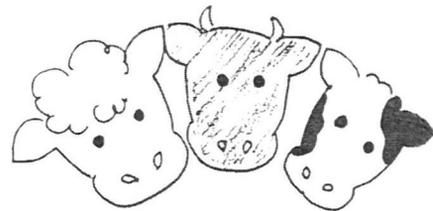
ウシはその用途で大きく分けて乳用種と肉用種に分けられていますが今回やって来た2つの品種について説明してみましよう。

### ●ホルスタイン Holstein

ウシとってまず思い浮かべる品種がこの白黒のまだら模様のこのウシでしょう。その今にも破裂しそうな大きな乳房。たくさんの乳をだし、家畜ウシとしての歴史も古いものがあります。オランダ北部、ドイツ北部が原産のウシで、アメリカで改良され肉用種としての改良も加えられました。世界でもっとも乳量が多く、世界各地で飼育され、多くの牧場でみかけることができ、観光牧場でも搾乳の実演として多くの方がみかけることでしょう。

### ●ジャージー Jersey

イギリスのチャネル諸島ジャージー島が原産です。毛色は淡褐色で、白斑があるものもいます。尾の房は白で、頭はやや細目で、前述のホルスタインよりひとまわり小型です。やや神経質な面があり、乳量あまり多くない品種ですが、乳脂率が高く、バターの製造に適しており、コクのある製品ができあがります。イギリスやデンマークなどを中心に広く分布しているのがみられています。

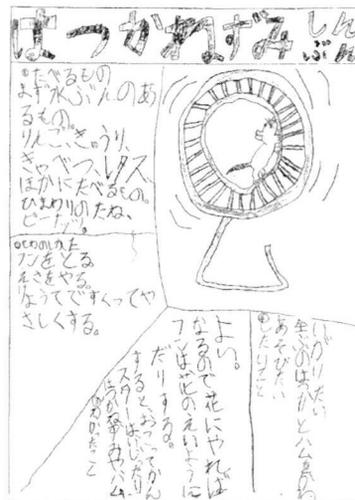
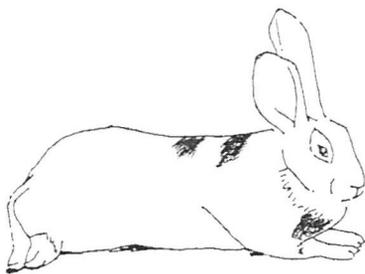


以上2品種以外にも多くの品種、たとえば、ヘレフォード、アバンディーン・アンガス、そして黒毛和種、褐色和種など他品種も各地域で飼育されています。

千葉市動物公園でも今後、さまざまな品種のウシの紹介・展示をして行き、なかなか触ることが少なくなって来たウシを飼育したいと思っています。（牧野 辰男 Tatsu Makino）

## おたよりコーナー

船橋市海神小学校1年生のみなさんからお手紙をいただきました。ここにお便りの一部を紹介したいと思います。



## 子ども動物園の活動内容の一部をご紹介します。

### 研修一習志野市教育研究会生活部会

平成9年8月19日、火曜日、子ども動物園内のステージ前に集合、車の都合等で9時10分に開始、オリエンテーション後、飼育センター2階に移動し、資料（動物を飼う意義・アメリカザリガニ・カタツムリ・モルモット・子ども動物園ようこそ等）に基づき解説をします。ウサギの雄・雌同居で飼育しているケースが多く、子供は生みますが子育てを放棄する親に、どう対処すべきか解らず、とまどうばかりで、さらに長期間の休暇（夏休み等）の対応の仕方、餌代が高い等現実が突きつけられてきました。そこで、根本的な飼育の仕方について質問を入れながら話しをすすめました。

時間	内容	実施場所
9:00～ 9:15	オリエンテーション	ステージ前
9:15～10:45	講義	飼育センター2F
10:45～11:00	休憩	
11:00～11:15	体験	子供牧場
11:15～11:30	体験	小動物コーナー
11:30～11:45	体験	コンタクトコーナー

生活科実習は現在小学校1・2年生を対象として実施している飼育体験です。どんなことができるのか、対象動物は何か、各グループの対応員数等々について、積極的な現場サイドに関する質問ができました。生活科実習の予約時期については、早いもの順で予約したくともなかなか予定した日がとれないとの意見に考えさせられました。生活科実習ができる場所が複数あればと思うのは私だけでしょうか。

動物に関する質問は限りなく、一般的な返事しかできなかったような気がしましたが、休憩をはさんで、生活科実習の現場体験ツアーに移りました。

### <子供牧場>

生活科実習時と同様、さわり方・馬体の手入れ・餌等について順次説明し、それらを先生方に納得してもらった上でシェットランドポニーを使用して実習を行い、最後に用意をした食パンを食べさせました。やはり、大人でも餌をあげるのは楽しいのか、何回も何回も餌をあげている先生がいっぱいいました。（先生の横顔は童心にかえったように見受けられたのですが…）



### <小動物コーナー>

平日のため、一般のお客様と一緒にしました。ウサギ・モルモットは赤ちゃんを抱くように実際に抱いてもらい、ハツカネズミ・ヒヨコは手をお皿にして実際に乗せて小動物とのふれあいを体験してもらいました。

### <コンタクトコーナー>

一般の出入口から入ってもらいました。ミミナガヤギが耳をブラブラさせながらかわいらしく先生方を出迎えてくれました。青草を与えながら、各々に毛質の違い、瞳の型、角の有無等を観察しました。最後にヒツジの毛で皮靴をふいてもらいました。靴はピカピカになったけれど、ベタベタして臭いがあるというところで終了時間になってしまいました。ご苦労様でした。

（林 まさ代 Masayo Hayashi）

## 小動物コーナー日誌より

毛の色が白く、目の赤いモルモットをコンタクトエリアに登場させるようになってから「目の黒い子がいいー」といわれることが多くなりました。

4、5才の女の子、モルモットを指しながら

「この中何が入っているの？」

係、「みんなと同じで、ごはんを食べると栄養になったり、うちになったりするものが入っているんだよ」

女の子は、自分のおなかをおさえて

「えーっ！」

5才くらいの男の子「ヒヨコはどうして口を閉じているのにしゃべれるの？」とつさに係は、「つぶやいているんじゃない？」と答えてしまいました。

一人で入ってきた女の子に、おかあさんが「ねずみさんさわれた？」と聞くと、その子は「うん、笑ってたよ。」と答えていました。



## 飼育よもやま話

Animal Episode

### 新しく来たマンドリルのオス

マンドリルは、アフリカのカメルーン、ガボン、コンゴの密林に生息するサルです。このマンドリルのオスが新しく広島安佐動物園からやって来ました。名前は一郎。この一郎君生まれて2才と9ヵ月しかたっていないため、5月14日に比較舎のマンドリルの部屋にやって来てもメスのおばさんマンドリルとはすぐに一緒にできないので、その夜はサルを展示と室内を出入りさせる通路（シュート）内にドックゲージを入れてその中に一郎を入れて、室内側の扉を開けて夜間のお見合いをさせました。次の日の朝一郎を先に展示場に出してその後からメスのおばさんマンドリルを外に出しましたが、メスは一郎に何の興味も示さずすぐエサを食べています。一方、一郎はいきなり見たことのない大きいメスが近くに来たものでおどろいてしまいエサを食べるどころではなくただ展示場内を逃げ回るばかりでした。



でも午後になるとだいぶなれて来たのか、自分からメスに近づくようになりましたがあまりメスに近付き過ぎるとメスに攻撃されてしまい、そのためメスには2メートルぐらいしか近寄らなくなりました。また一郎は人間によって育てられたために、展示側から一郎の様子を観察しに行くのと両足の間に手を入れて背中を丸め落ち着かない様子です。時々手の指や足の指をくわえてパニック状態になってしまいますので開園時間中のお客さんの前で観察することができません。

夕方に室内に収容する時も、メスのおばさんマンドリルはいつもの通りシュートの扉を開けるとすぐに入って来ますが一郎はどこに入っていいものか、メスに近付きたくないため、放飼場内をうろろするばかりです。しかし、シュート内にエサのサツマイモを入れるとすぐにシュートに入って来て収容することができましたが5日後の5月19日にメスに攻撃されてしまったからシュートに入ろうとはしなくなっていました。サツマイモやリンゴ、バナナをシュートに入れても扉を閉める瞬間エサを手に入れた放飼場へと素早く逃げてしまいます。何回やっても何日たってもシュートに入ってくれません。放飼場の掃除はメスを室内に入れて一郎のいる放飼場に入ってフンと食べ残しをチリトリで掃除します。一郎のいる放飼場に私が入って行っても全然気にすることもなく、少し離れて私の周りを回っているだけです。こんなふうに人間に攻撃をしないのは、やはり人間によって育てられているためです。それにしても、もう秋になるろうとしているのにシュートに入ろうとしません。なんとか、冬になる前に室内に入るようにしたいと日夜努力しているのですがなかなか入ってくれません。これからも私の苦労は続きそうです。

(鈴木 克典 Katsunori Suzuki)

## 健康管理センターから

From the Animal Health Center

### 「野生動物医学会」に参加して

毎日自分の仕事をこなしつつ、ふと「他の動物園はどんなふうになっているのだろうか？自分のやり方でいいのかな？」と思うことがあります。なにしろ日本はもとより世界にもたくさんの動物園・水族館があるわけで、よその事情は気になるものです。そんな気持ちは誰しも同じとみえて、このごろ動物関係の集まりがたくさん出来てきました。

今回は園の外へ目を向け、ある学会に参加したことをお話します。

「日本野生動物医学会」という学会が最近つづられました。実は今まで日本には野生動物を対象とした獣医関係の学会はなかったのです。この学会には獣医師だけではなく、野生動物に関心のある方や研究者も参加しています。その第3回大会が7



### 開催案内のチラシ

月に岐阜で開催されました。今回は日本の鷹匠の方やアメリカで野生動物保護に携わっている方を講師に招いたり、記憶に新しい日本海のロシアタンカー原油流出事故による海鳥の被害と保護活動の報告もありました。その他の発表で興味を持ったのは動物の寄生虫の種の同定<sup>中注</sup>です。動物園では解剖や糞の検査で時に動物の寄生虫にお目にかかることがあります。でもたいてい「寄生虫がいる」で終わりで必要ならば虫下しはしますが、それが何という名なのかまでは滅多に追求しません。しかし、大学の研究室と協力し、寄生虫を丁寧に調べていけば新種が次々発見されているのです。寄生虫によっては、特定の動物にしか寄生できないものもあります。だからその動物が絶滅に瀕している時は、その寄生虫もまた絶滅しそうなのです。ということで人間には全く知られずに絶滅した寄生虫も少なくないのでは？と考えさせられました。

さて、様々な講演や発表を開くのもさることながら、楽しみは休憩・食事・懇親会です。そこでは日頃仕事で疑問に思っていることを達人の方々に気軽に聞くことができるんです（飲食もできますが）。ふだんは遠く離れて会えない人達と、直接話ができるのは大切な事です。この場で共同研究が決まることもあるのですから。情報の交換・公開は動物園にも大事なのだと思います。

一般の方が参加できる集まりもありますから、動物に興味をお持ちの皆さん、一度こんな会をのぞいてみてはいかがでしょうか？。

※注 同定一特徴を調べて種別を判別すること

(辻村 直美 Naomi Tsujimura)

## 動物公園の動物…②①

### Animals in the Chiba Zoological Park

# ゴリラ

ゴリラは動物の中でも、一番魅力のある動物だと思っている人は大勢いると思います。

ゴリラと言う名前の由来は、約2,500年ほど前に西アフリカ海岸を航海した古代カルタゴ出身の探検家が名付けたもので、「毛深い人間」という意味です。分類学的に、人間にもっとも近い類人猿の中では、最大の種類です。ゴリラは、ニシローランドゴリラ、ヒガシローランドゴリラ、マウンテンゴリラの3亜種に分けられます。世界の動物園で飼育されているゴリラのほとんどが、ニシローランドゴリラで、千葉市動物公園で飼育しているのもニシローランドゴリラです。

ニシローランドゴリラは、アフリカ大陸中央部のカメルーン、コンゴ、ザイールなどの常緑樹林に生息しています。このゴリラは、最近になって生態調査が行なわれ始めました。他のゴリラと同様に、1頭のオスと数頭のメス及び、その子供達からなる群れで生活しており、群れの大きさは、他のゴリラと比べ、小さく平均6頭ぐらい（最大12頭）です。性格は大きな体に似合わず、神経質でおとなしく、チンパンジーと同じくらい知能の高い動物です。大人のオスは、頭部が盛り上り、背中が銀白色になりシルバーバックと呼ばれ、体重は140～180kg位になりますが、メスはずっと小さくオスの体重の1/2から2/3位しかありません。繁殖期は特になく、一年中出産がみられます。妊娠期間は260日で人間より短く、生まれた仔の体重は2kg弱ですが、成長は早く、人間の2倍の早さで成長します。ゴリラの食べ物は、野生のセロリ、タケノコなどの繊維の多い植物と果実が主食ですが、ごくたまにシロアリなどの昆虫も食べます。

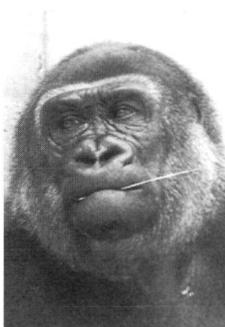
現在、野生のゴリラは、人口増加に伴う森林破壊や密猟などで、その数は減りつづけており、保護活動が行なわれています。

千葉市動物公園では、1990年より、オスの“モン太”（推定11才）、“モモ子”（推定13才）を飼育していますが現在まで繁殖には至っておりません。日本の動物園においても、ゴリラ飼育の新しい試みとして従来のペア飼育から、群れ飼育のための共同繁殖が進められています。その一環として、当園にも大阪の天王寺動物園よりオスの“ゴロ”（推定33才）が来園しました。何度か、モモ子と同居を試みましたが、うまくいかず、現在“モモ子”は、“モン太”といっしょに展示しています。千葉市動物園のゴリラの繁殖はまだまだ時間がかかりそうです。

（柴海 邦成 Kunishige Shibakai）



モン太 推定11歳



モモ子 推定13歳



ゴロ 推定33歳

## 動物公園の植物…①①

### The plants in the Chiba Zoological Park

# ヤマモミジ

ヤマモミジは、カエデ科カエデ属の落葉高木で、山地に生えていて高さ5～10mになります。分布は主に日本海側です。

単にモミジといえば、イロハモミジのことを指すようですが、ヤマモミジは、オオモミジと共にイロハモミジの変種です。

モミジは、他にもたくさんの品種があり、似たような葉で区別が付かないような気もします。

カエデ属で、広く親しまれている園芸品種をみると、イロハモミジ系、オオモミジ系、ヤマモミジ系などと、各系統があるようです。よく見かけられ、目立つのは、春から秋まで葉が紫紅色の、ノムラモミジ（オオモミジ系）などがあります。

ヤマモミジの葉は、母種によく似ていますが、やや大きく直径5～10cm位で7～9に裂けています。他のモミジ同様、赤ちゃんが手を広げたような可愛い形で、裂片は卵状の楕円形か、狭い卵形で先は尾状に鋭くとがっていて、ふちには不ぞろいの重鋸歯があります。

花は5月頃咲き、雄花と両性花があります。花弁は5個で淡紅色です。

種は、約2cm位で、水平に開いた2枚プロペラのような形をしている翼果です。

昔から、「マツ、サクラ、モミジ千本にて景をなす」といわれるとおり、庭園、公園、風景地などに必要な造園材料です。また、身近に風情を觀賞するため、盆栽としても仕立てられます。時期になると、葉を黄色から紅色に染め、日々秋の深まりを感じさせてくれます。

挨拶用語で用いる「秋色いよいよ濃くなり」などの語句から、変化する紅葉の様子をあてはめて考えてみると、第一に思い浮かぶのは、モミジやカエデではないでしょうか。

葉が紅葉するには、植物生理学上、大変難しい説となるようですが、結論は、葉の中に紅化を支配するタンニンの成分があり、日中から夜間にかけての急激な気温低下と、かつ、降雨が少なくなり、大気及び地中の水分の減少が必要条件であるとされています。



動物公園内も秋冷の候には、他の落葉樹とともに、色濃くなるモミジが各ゾーンで見られますが、なかでも正門に近い大池に足を向けると、池の水面に映る格別の紅葉を見ることができます。

（齋藤 哲朗 Tetsuro Saito）

# 動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

'97年1月1日～'97年6月30日

- 1月5日 ビグミーマーモセット（1頭）繁殖  
「餅つき大会」開催
- 1月7日 アジアゾウ（雄スラタラ）、昨日位から、荒れてきている  
オウカンエボシドリ（5羽）、検疫開けて本日よりバードホールで展示開始
- 1月9日 東京都恩賜上野動物園から受贈したホオカザリゾルの種卵、人工孵化する
- 1月10日 東京都井の頭自然文化園と、オシドリ（雄5羽・雌1羽）とヨシガモ（雄1羽・雌1羽）の相互寄贈実施



- 1月12日 「バードウォッチング」開催、（25種確認、前年度と比較して1種減）
- 1月18日 ハシビロコウ（雄1羽）、急性心不全で死亡



- 1月20日 マカロニペンギン（雄1羽）、動物交換で新着
- 1月31日 カリフォルニアアシカ（雌ムテキ）、離乳のためペンギン池予備プールに移動
- 2月3日 モウコノウマ（雌レイ）、鎮静下で削蹄実施
- 2月5日 トナカイ（雌ナウシカ）、右角落角
- 2月8日 中学生職場訪問あり（千葉市立稲毛中学校・千葉市立高洲第一中学校）
- 2月10日 チンパンジー（雌サチ）、動物交換で搬出
- アカハシリウキュウガモ（2羽）、動物交換で新着
- 2月17日 ワタボウシパンシェ（2頭）繁殖

- 2月22日 ルリコンゴウインコ（雌1羽）、急性心不全で死亡
- 3月5日 行川アイランドと、シロガオマーモセット（雄1頭・雌1頭）、クロミマーモセット（雄1頭）とオグロマーモセット（雄1頭・雌1頭）の相互寄贈実施  
シシオザル（雌1頭）、肺炎で死亡  
酪農学園大学学生、本日より獣医実習開始（17日まで）
- 3月8日 アカカンガルー、仔が袋へ移動して行く様子を確認  
「アニマルスクール」開催（動物公園の道具）
- 3月9日 子ども動物園のウマ5頭、削蹄実施（削蹄師による）



- 3月10日 マンドリル（雄1頭）、クロヅル（雄1羽）、動物交換で新着  
イヌワシ、2卵目産卵確認（1卵目は3月7日産卵）
- 3月12日 長野市茶臼山動物園職員2名、来園
- 3月13日 高知県立のいち動物公園副園長、絹田氏来園  
コサンケイ、産卵始まる
- 3月17日 ベニイロフラミンゴ10羽、新着
- 3月19日 当園にて総合消防訓練実施



- 3月20日 「春のZOOクイズラリー」開催
- 3月23日 カリフォルニアアシカ（雌1頭）、スリランカ国立動物園に寄贈  
「ワンポイントウォッチング」開催（グレビーシマウマ）
- 3月24日 ベニイロフラミンゴ7羽（展示個体）に、マイクロチップ装着
- 3月26日 ワタボウシパンシェ（雌2頭）、ブリーディングローンで、宝塚動植物園に貸出
- 3月30日 ヘビクイワシ（雄）、巢台に巣材を運び始める
- 3月31日 アフリカヘラサギ（雌1羽）、愛媛県立とべ動物園と、雄1羽との動物交換実施

- 4月6日 タンチョウ、1卵目産卵（2卵目は4月8日に産卵）
- 4月7日 アミメキリン（雄1頭）、動物交換で搬出  
アフリカハゲコウ、外気温が上がって来たので草原  
放飼場に戻す
- 4月9日 オオカンガルー（1頭）、繁殖（顔出し）
- 4月14日 フンボルトペンギン（2羽）、自然孵化
- 4月17日 コサンケイ（4羽）、人工孵化
- 4月20日 「ワンポイントウォッチング」開催（アルダブラゾ  
ウガメ）
- 4月23日 グレビーシマウマ（雌サクラ）、麻酔下で削蹄実施
- 4月24日 アビシニアコロボス（2頭）、動物交換で搬出
- 4月30日 ヘビクイワシ、1卵目産卵（2卵目は5月3日に確認）
- 5月1日 コサンケイ（雛8羽）に、鶏痘ワクチン接種



5月10日 「羊の毛刈りの実演」開催



- 5月11日 タンチョウ（2羽）、自然孵化  
「愛鳥週間特別講演会」開催  
(講師 ケビン・ショート氏)
- 5月13日 オグロマーモセット（2頭）、検疫明けて本日より  
展示開始
- 5月18日 「ゆかいな森の音楽会」開催
- 5月22日 市川市動植物園と、アカハナグマ（雌2頭）とミー  
アキヤット（雄2頭）の相互寄贈実施
- 5月23日 ヒオドシジュケイ（2羽）、人工孵化  
マカロニペンギン（雌1羽）、胸腔内腫瘍で死亡
- 5月25日 「ワンポイントウォッチング」開催（フタコブラク  
ダ）
- 5月30日 ムギワラトキ（1羽）、自然孵化
- 6月1日 麻布大学学生、本日より定期的にゾウ行動研究調査  
開始（9月まで）



ゆかいな森の音楽会 開催風景

- 6月2日 カリフォルニアアシカ（雌キキ）、1頭出産  
ヨシガモ（1羽）、人工孵化  
キジ類、猛禽類、ニューカッスル予防薬接種



- 6月8日 カリフォルニアアシカ（雌ミュウ）、1頭出産
- 6月10日 ルリゴシボタンインコ（15羽）、緊急保護で受入れ
- 6月14日 「アニマルスクール」開催（手・足のはなし）



- 6月17日 ヘビクイワシ（2羽）、自然孵化
- 6月19日 アカカンガルー（雌1頭）、口内腫瘍で死亡
- 6月21日 台風7号接近のため来園者殆どなし
- 6月22日 グレビーシマウマ全頭、日本脳炎予防接種  
「ワンポイントウォッチング」開催（ジェフロイク  
モザル）
- 6月25日 キングペンギン、当園では初めて産卵するが、翌日  
卵は割れてしまう



アルダブラゾウガメ